

特集

赤ちゃんいまむかし

入館料無料

2009

9月26日(土) - 12月6日(日)

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：毎週月曜日、第3日曜日、祝日

鞍手町歴史民俗資料館

〒807-1311 福岡県鞍手郡鞍手町大字小牧 2097 番地

TEL 0949 - 42 - 3200



▲昭和30年代初誕生祝いの物選び

◆**初誕生の祝い**
生まれた時には自分で何も出来なかった赤ちゃんが、はいはいを始め、つかまり立ちをし、生後1年ごろからよちよちと歩き始めます。初めての誕生日を無事に迎えられるということは、人間界にしっかりと足を踏みしめたということであり、初誕生の祝いは誕生の儀礼の終わりとして大切な意味を持っています。
初誕生では、小さなわら草履を履かせた赤ちゃんに一升餅を背負わせ、誕生餅を踏ませて祝いました。また、赤ちゃんの前に筆、そろばん、ものさし、はさみなどを並べ、子どもが取ったものでその子の将来を占う「物選心」をするイエもありました。



▲昭和50年代の初誕生



▲昭和初期の初正月



▲お食い初め



▲昭和50年代の宮参り

◆**初正月・初節句の祝い**
戦前は正月で歳をとったので、赤ちゃんが初めて迎える正月には、初めて年を加えるという特別の祝いの意味がありました。この時男児には破魔弓が、女児には羽子板が贈られました。
また、女の子の桃の節句(3月3日)には雛人形、男の子の菖蒲の節句(5月5日)には鯉のぼりが贈られ祝宴をすることは現在でも広く行われています。
遠賀川河口の芦屋では、八朔(陰暦8月1日)で田の実の節句(行事として長男が生まれたイエではわら馬、長女が生まれたイエではタゴビーナ(団子雛)を作って祝います。鞍手町でも永谷の一部のイエでこの行事が行われていたといわれています。

◆**初正月・初節句の祝い**

◆**百日祝い**
生後百日目をモモカ(百日)といい、食い初めの行事をして祝いました。
赤飯と尾頭付きの魚で膳をこしらえ、箸で赤ちゃんの口に付けてやり、食べさせるまねをします。また膳には、石のように歯が強くなれという願いを込めて、河原で拾った小石を付け、噛まねをさせました。石は固い不変なものとして意識され、この石の力を借りて生児の生命力を身体に安置させようとした儀礼と思われます。
また、この日子ごにも初めて箱膳や食器を揃えるというところもありました。

◆**百日祝い**

◆**宮参り**
宮参りは、赤ちゃんが初めて氏神様に参り、ムラの成員として認められる儀礼で、生後30日前後に行われました。
赤ちゃんには産婦の里から贈られた宮参り着物を着せ、姑が赤ちゃんを抱き産婦とともに参りし、神前に参ると、拜殿に子どもを寝かせ、わざと泣かせて氏神様に声を聞かせ、氏子になったことを報告しました。
帰りには親戚に立ち寄り、お神酒とイリコをいただいたり、晴れ着の紐にヒモ銭を結んでもらったり、長生きできるようにと年長者に抱いてもらったりしました。

◆**宮参り**

お母さんのおなかに小さな命が芽生えました。およそ10か月でかわいい赤ちゃんの誕生です。
「男の子かな?女の子かな?」
「どちらでも、無事に生まれてきて欲しい」
お産や育児は時代の流れとともに大きく変化してきましたが、新しい家族を迎える喜びや祈りは、今も昔も変わりません。
鞍手町歴史民俗資料館では出産と育児に関する民俗を紹介します。私たち一人ひとりが、望まれ、祝福され、大切に育まれた「命」であることを実感できる企画展です。

▲昭和初期の赤ちゃん

◆**みごもる**

妊娠することを「みごもる」「身重になる」「はらむ」といい、周りからは「腹が太くなった」「ヤヤが入ったんなる」「ヨワイとやないね」などといわれました。ヨワイはツワリのこと、ヨワリ、ヨワリコトともいいました。

◆**神仏への祈り**

医療技術の進歩により、出産の様子はすいぶん変化しましたが、妊娠はいつの時代でも神秘的なもので、女性たちが命がけで出産に臨むことに変わりありません。出産に関わる信仰が、普段信仰とは縁の薄い、若い世代にまで受け入れられているのは、それがまさに命のいのちなみであるからでしょう。
子授けや安産を祈願する神仏は、土地によってさまざま、各地の氏神や子育て地蔵、子安観音、子授け観音、塩釜様、淡島様、水天宮、山の神、稻荷、道祖神、鬼子母神などがあります。中でも粕屋郡宇美町の宇美八幡宮には、その由緒から、多くの人が祈願に訪れます。

◆**帯祝い**

妊娠5ヶ月頃になると、そろそろ赤ちゃんの動きをお腹で感じられるようになってきます。妊婦さんにとっては、我が子の存在を実感できる幸せな時期です。
日本では、古来よりこの時期に帯祝いというものを行ってきました。多くは妊娠5か月目の戌の日、妊婦が初めて腹帯(岩田帯)を身に着け、産婆や近親者とともに会食をして祝いました。この祝いに伴って妊婦さんは妊娠を世間披露することになります。
腹帯の着用は日本特有の風習で、しかも科学的な効用はほとんどないということです。しかし、今でもほとんどの妊婦さんが何らかの形の腹帯を当たり前のように着用しています。腹帯の霊力は現代でも衰えてはいないようです。

◆**赤ちゃんの誕生**

「オキヤー、オキヤー」かわいいう産声が産室に響くと、家族一人ひとりに安堵と喜びの表情があふれます。待ちに待った赤ちゃんの誕生です。
産院での出産が主流になる前、この地域では自宅の納戸(寢室)で出産するのが普通でした。産室にはウブガミ(産神)が祀られ、赤ちゃんの誕生を見守っていました。
今、お産は仰向け状態で行うのが一般的ですが、大正時代初頃までは座って産むのが普通でした。座産の場合は、タンスの持ち手やハシゴ、天井から下げた力綱につかまって産んだということです。

◆**赤ちゃんの誕生**



▲昭和30年代の産湯を使う新生児



▲ガードル型の岩田帯



▲宇美八幡宮の子安の石



▲昭和39年の母子手帳